放課後、不良生徒がさぼるのによく使用している屋上倉庫で一人の男子生徒がタバコを吹かしながらマットの上で寝転んでいた、その周りには缶ビールの空き缶まで転がっている。
「あなた終業のチャイムはとっくに鳴ったわよ、こんな所で何をしてるの！」
「あん？」
そんな彼を女教師高城寛子がそばに立ち、男子生徒を見下ろしている。
「なんだよ……先生」

「あなた、今日の授業に出ていないでしょ！ずっとここでさぼっていたの？」
「それがどうしたよ？」
「どうしたもこうしたもないわよ！ちゃんと授業に出なさい！」
「うるせえなあ……」
寝転びながら高城を見上げると男からはスカートの中が丸見えで
それを見てニヤリと笑みを浮かべる。

（パンティー丸見えじゃねーか、気づいてねえのか？それともわざと見せつけてんのかよ？）
高城先生の大人っぽい紫のパンティーを見て雄の本能を刺激された彼の股間に血液が集中していきズボンの中でムクムクと硬く大きくなるのを感じる。

「もういいわ早く起きて、帰りなさい」
「へいへい」
そう言って立ち去ろうと背を向けた高城を後ろから抱き寄せる。
「きゃっあ!?な、何!?、何をしているの!離しなさい!!」
突然背後から抱きしめられ胸に手を伸ばし、柔らかな乳房をこねくり回してくる。
「いやっ!止めなさい!!大声出すわよ!!」
「無駄だぜ先生、こんな時間にこんな所へ人なんか来ねえよ」
!?
ムニ
ムニ
必死に抵抗する高城だが男子生徒の力が強く振りほどけない
「前からこのデケー胸触りたかったんだよなあ、想像通りやわらけー」
「んくぅ……はうっ」
イヤらしい手つきで高城の胸を揉む男の股間が尻に押し付けられる。
「俺のチンコもビンビンになってきてるぜ、分かるか?」
「そ、そんなモノ押し付けないで!汚らわしい!」
酒臭い息とタバコの匂いに顔をしかめ抵抗を続けるが、男子生徒はますます興奮していく。
「おとなしくしろよ先生、気持ちよくさせてやるからさ」
「あっく、誰があなたの言いなりなんかに…、んあぁっ」

男の手がブラウスを掴み左右へと引き裂いた。
「きゃあぁぁーー」
ボタンが飛び散りブラジャーに包まれた豊満なおっぱいが露になる。
「おお～、いいね先生、エロい下着つけてんじゃん」
「いや、見ないで……」
ぷるんっ♡
ぷるんっ♡
ガバッ
レースで装飾され光沢のある紫色のブラジャーを着けているおっぱいをまじまじと見つめられ羞恥する高城。
「すげえデカいな、Fカップはあるんじゃねえか？肌も綺麗だしたまんねーな」

両手で男が包み込むようにブラの上から胸を掴んできた。
「ああ～柔らけぇ、すげえボリュームだぜ」
「んふぅ……」
揉みしだかれ男の手の中でグニグニと形を変えるおっぱい。
「あぁぁ…、いやぁ…」
布越しでも伝わる男の指使いに思わず甘い吐息を漏らしてしまう。
あぁ
はー
はー
むにゅっ
むにゅんっ
むにゅっ
むにゅんっ
「先生感じてんのか？乳首も立ってねーか？」
「そ、そんなはずないわ……」
否定するが顔はすでに赤く染まり目はトロンとしていた。
（ああ、だめ……胸を触られただけなのに身体の奥がきゅんって熱くなる）
男の手の動きに合わせるように高城の腰がくねる。
「へへ、腰振っちゃってエロイぜ先生」
「くぅ……」

胸の感触を一通り楽しんだ男は高城を正面に向かせ壁に押し付ける。
「へへ、先生キスしようぜキス、んー」
そう言って男の唇が迫って来る。
「い、いやっ!?」
ちゅぷ
ちゅぷ
ん
ぐ
ぐっ!
顔を背け拒絶するが押さえつけられ無理やり口づけされてしまう。
「んぐぅ、んー!」
濃厚なディープキスで口を塞がれ唾液を流し込まれる。
ニコチンとアルコール臭さが入り混じった味に吐きそうになる。

「むちゅ、れろぉ、グチュグチュ」
舌を絡ませられ口腔内を犯してくる男。
気持ち悪さを感じつつも舌と舌を絡め合わせられる度に
ゾクゾクとした感覚に襲われ頭がボーっとしてくる。
ちゅ♡ちゅっ
くちゃ♡くちゃ♡

「ぷはぁ、はあ、はあ……」
ようやく男が離れると二人の間に唾液の糸が伸びて切れた。
「どうだった先生？俺とのチューは？」
「最低よ……」
悔しさと怒りで涙目になりながら睨みつける高城だが頬を上気させ
瞳は潤み頬を紅潮させていて迫力はなくむしろ扇情的だった。
はー…
はー…
トロォ〜
むぎ
むぎ

その表情に男はさらに興奮してブラをずり上げるとブルンッと
大きな巨乳が飛び出してきた。
「うひょー、大きさも色も綺麗なピンクの
乳首じゃねーか、美味そうだ」
「お、お願いだからもう止めて……」
「止めるわけねーだろうが」
ぶるるんっ…♡

そう言うと男は高城の乳首を口に含んだ。
「ひゃうん！？」
生暖かい舌で舐められ吸われ、甘い快感を感じてしまう。
「んあぁっいや、気持ち悪い、やめなさい！んはぁっ!!」
なんとか逃れようと身をよじるが力が入らず男を振り払えない。
「へへ、感じてるな、乳首が硬く勃起してきてるぞ先生」
「違う！それは……」
否定しようとするが下半身が熱くなり
モジモジと太股を擦り合わせて体を震わせる。
唾液をたっぷりとまぶしながら乳首をむしゃぶり続ける男。
「くふぅ…あんっ！いや、こんな…はあぁぁっ」
むちゅ、ぬちゅ、ちゅう、レロォ
「んくっ！あっ！くふうっ！！」
「ほらもっといい声出せって、ここには誰も来ねえから」
「だ、誰が……あうっ！ああん！ダメっ！！」

尖っている両の乳首を指で摘んでクリクリとこねる。
「はうっ！そんな強くされたら……あふぅ！いや！はああーっ！」
「乳首気持ちいいかい先生？」
「そ、そんなことないわ！」
「素直になれよ、本当は気持ちいいんだろ？」
「き、気持ちよくなんかないわよ！」
強情を張る高城に意地悪く笑う男。
「あっくぅ、んふぅ、んあっ、あああっ！」
グニュグニュと乳房を揉まれながら乳首を責められ続け
高城は腰砕けになって座り込んでしまう。

「へへっ、今度は俺のをしゃぶれよ」
「い、嫌よ誰がそんなモノ！」
ズボンを脱ぎ半裸になった男が高城の頬に亀頭部分を押しつけてくる。
ヌルヌルと光る先走り汁が顔に塗られ汚される屈辱に唇を噛み締める。
「んくっ、やめて汚らわしい」
「口開けろよ」
「いやよ」
「なら無理矢理ぶち込むぜ？」
グニ
グニ
拒否する高城の顔にぐいぐいと肉棒を押しつけてくる男。
鼻をつく悪臭に思わず吐きそうになる高城だが口を閉じ必死に耐える。
「ほれ、どうするんだ？俺はどっちでもいいけどよ」
「……くっ、口ですればいいのね……」
仕方なく高城は男根を手で掴み口に含んでいった。

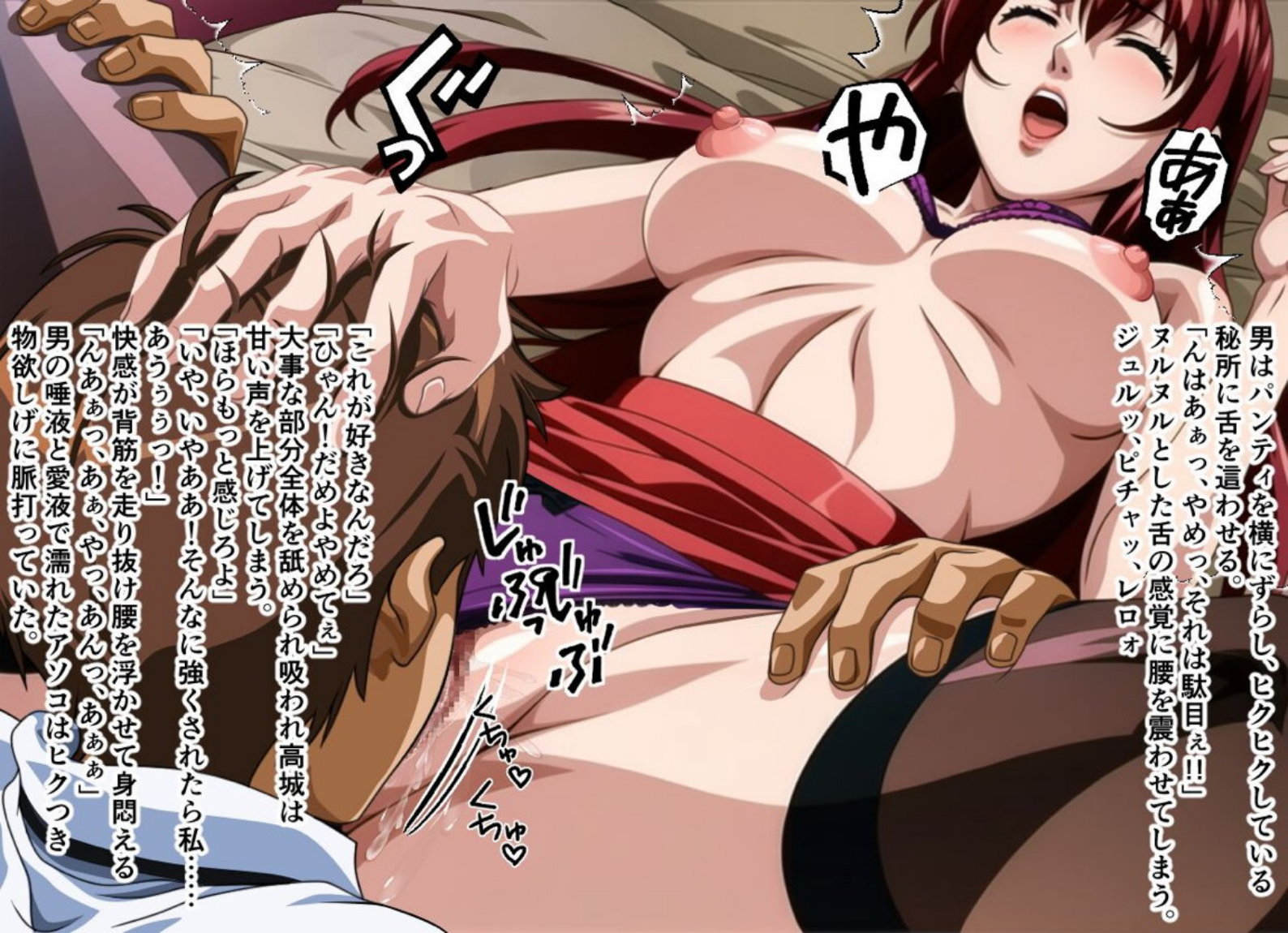
「歯を立てるなよ」
「……」
屈辱に耐えながらフェラチオをすると男は満足そうな顔を浮かべ頭を撫でてくる。
「おお、上手いな先生、今まで何本くわえ込んだんだよ」
その言葉にキッっと睨み付ける。
「おー怖え、でもそんな表情もそそるなぁ」
「んぐぅ……じゅぶ、ちゅぷ、じゅるる」
喉の奥まで飲み込み奉仕を続ける。
口内に含んだ肉棒に舌を絡ませ濃厚なフェラを続けていくうちに男の息遣いが荒くなる。
じゅぷ
じゅぷ
「ハァハァ、スゲーな先生、そんなテクニックどこで覚えたんだ？」
「うるひゃいわね……黙ってなしゃひゃいよ……」
亀頭部分から滲む先走り汁の苦味に眉をしかめながらも懸命に舌を使い吸い上げていく。
ジュポッ！ヌプッ！グチュッ！
嫌悪感を抱きつつひたすらに男をイカせようと高城は必死に奉仕しを続ける。
「んくっ、くそっ、出そうだ」
「んんっ！？」

男は高城の頭を掴み激しく前後に動かしてきた。
『!? むぐうっ!?』
頭を固定され激しく出し入れされる肉棒。
口の中を犯され苦しさに涙をにじませる
(苦しい、臭い、汚い)
「ハァ、ハァ、先生の口マンコ最高だぜ」
ぐぽっ
ぐぽっ
「んんっ!んごぉっ!おぶっ!んぶううっ!!」
「おお!、出る!、出すぞ!全部飲めよ!!」
ドピュッビュルルルーーー!!
大量の精液が流し込まれ高城の口内は男のザーメンで満たされる。
「んぶっ!んぐうううううーーーー!!!」
いきなりの事で驚くが吐き出すことなど出来ずに
高城は男の精液を必死に飲み込んでいく。
「うぷっ、ごく、ごくんっ」
びくッ
びくッ

「ふい～出した出した」
射精を終えズルリと口から抜かれる男根。
ゴホゴホッと咳き込みつつ飲みきれなかった白濁した液体が高城の口から胸元にかけて垂れ落ちる。
「げほっ！うえぇ酷い味……」
「ははは、わりぃな先生。お詫びに今度は気持ちよくしてやるよ」
「えっ？……きゃああ！！」
はあ
ピク
ピク
どろぉー
はあ

シャツを剥ぎ取りマットへと押し倒してスカートを捲り上げ両足を広げると
露になる紫色のパンティー。
「だめっ！見ないで！」
慌てて両手で隠そうとするが時すでに遅く、股間部分の染みを見られてしまう。
「なんだ先生、濡れてるじゃないか」
「ち、違、これは……」
恥ずかしさに顔を真っ赤にして震える。
「大丈夫だって、俺がちゃんと気持ちよくしてやるからさ」
「い、いや……やめ……んくぅ」
ジワァ～…♡

男の指が割れ目をなぞりながらクリトリスを刺激する。
「ひゃうん！？」
敏感な部分を触られビクンと身体が跳ね上がる高城。
「おいおいこんなんで感じるのかよ先生、淫乱だな」
「いや、いや、触らないで！」
スリスリと擦られる度に快感が沸き上がり声が抑えられなくなる。
「ああっ！ダメっ！そこはダメなの！」
「ここが良いんだろ？」
グチュグチュと水音が響き渡り股間の染みが広がっていく。
「ああん！そこばっかり弄られたらぁ！、はぁん！」
恥ずかしさに顔を赤くしながら身悶える。


男はパンティを横にずらし、ヒクヒクしている秘所に舌を這わせる。
「んはあぁっ、やめっ、それは駄目ぇ!!」
ヌルヌルとした舌の感覚に腰を震わせてしまう。
ジュルッ、ピチャッ、レロォ
「これが好きなんだろ」
「ひゃん!だめよやめてぇ」
大事な部分全体を舐められ吸われ高城は甘い声を上げてしまう。
「ほらもっと感じろよ」
「いや、いやああ!そんなに強くされたら私……あうぅぅっ!」
快感が背筋を走り抜け腰を浮かせて身悶える
「んあぁっ、あぁ、やっ、あんっ、あぁぁ」
男の唾液と愛液で濡れたアソコはヒクつき物欲しげに脈打っていた。
あぁ
ゃ
ぶっ
じゅるるっ
ぶ
くちゅ♡
くちゅ♡

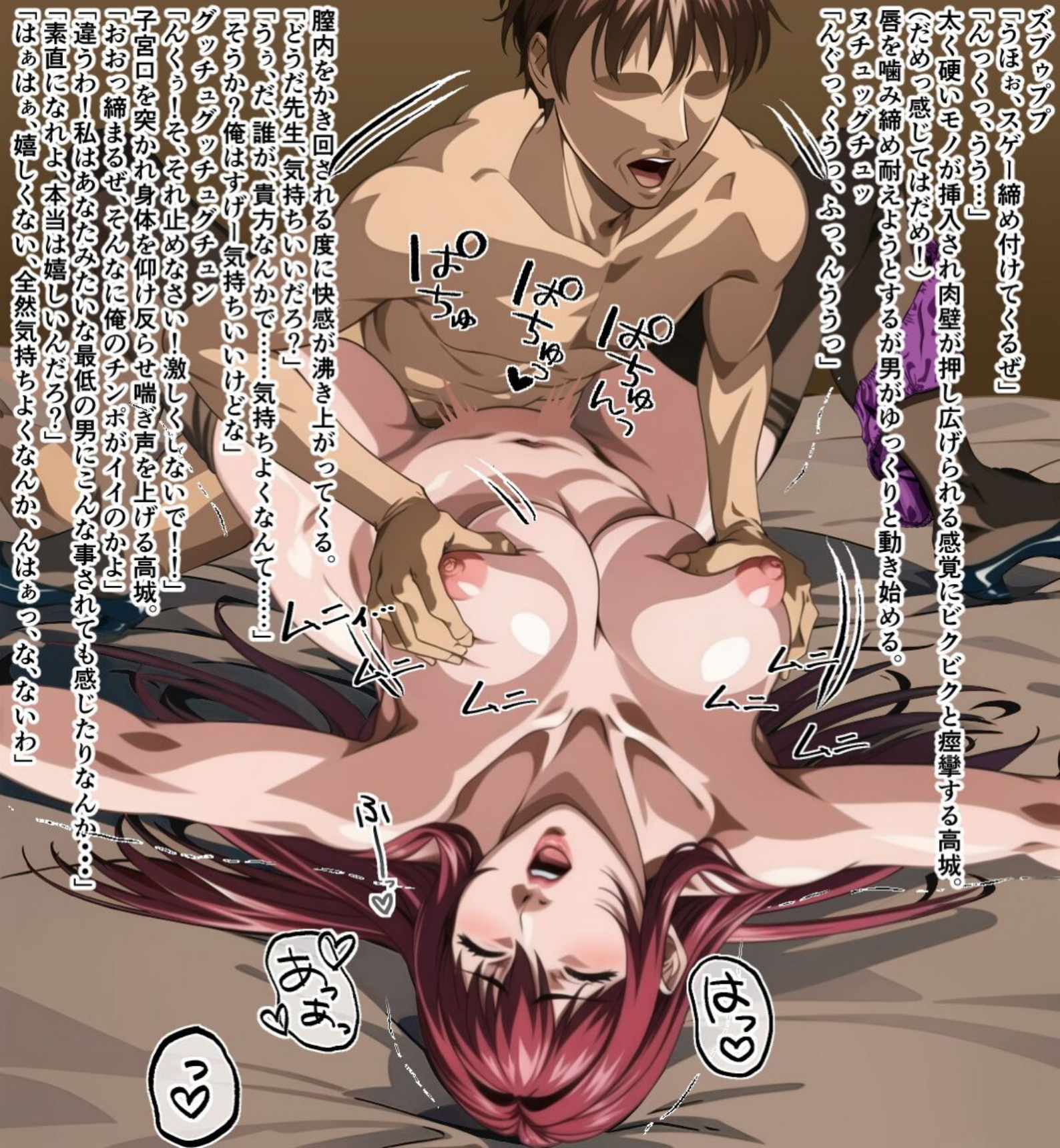
「それじゃ本番行くか、脱がすぞ」
そう言ってパンティを一気に引き下ろすと
片足だけ抜き取り足の間に体を割り込ませる。

ぐいっ

「へへ、もう準備万端じゃねえか」
「い、嫌……お願いだから許して……」
「何言ってんだよ、これからが本番
だろうが」
男は制服を脱ぎ捨て全裸になると
ギンギンに反り返った肉棒を
オマンコにあてがう。

くちゅっ
くちゅっ♡

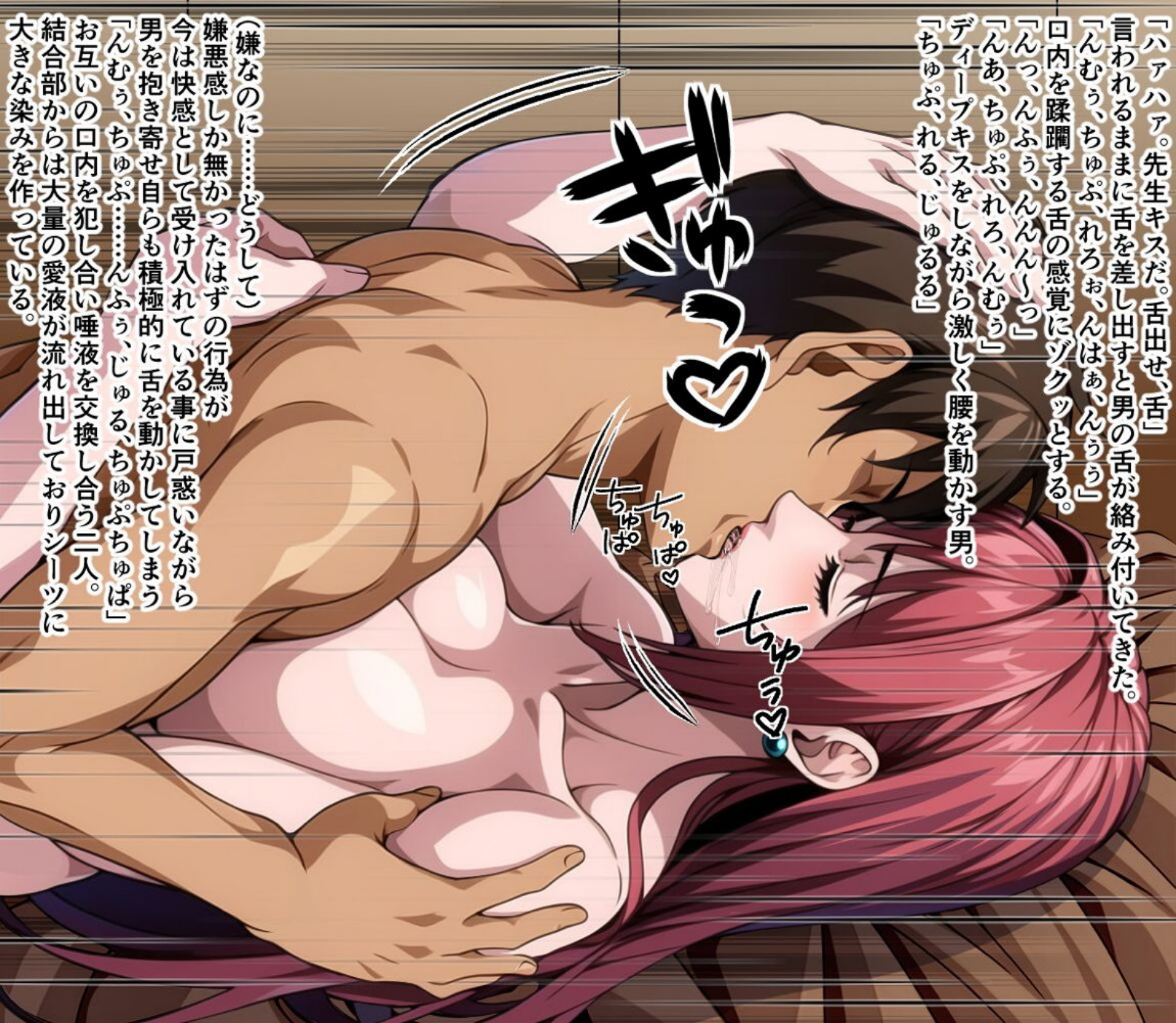
ビクッ♡
ビクッ♡


ズブゥププ
「うほぉ、スゲー締め付けてくるぜ」
「んっくっ、うう…」
太く硬いモノが挿入され肉壁が押し広げられる感覚にビクビクと痙攣する高城。
(だめっ感じてはだめ!)
唇を噛み締め耐えようとするが男がゆっくりと動き始める。
ヌチュッグチュッ
「んぐっ、くうっ、ふっ、んううっ」
ぱちゅんっ
ぱちゅぱちゅ
ぱちゅ
ムニ
ムニ
ムニ
ムニ
ムニ
ムニ
膣内をかき回される度に快感が沸き上がってくる。
「どうだ先生、気持ちいいだろ?」
「うぅ、だ、誰が、貴方なんかで……気持ちよくなんて……」
「そうか?俺はすげー気持ちいいけどな」
グッチュグッチュグチュン
「んくぅ!そ、それ止めなさい!激しくしないで!!」
子宮口を突かれ身体を仰け反らせ喘ぎ声を上げる高城。
「おおっ締まるぜ、そんなに俺のチンポがイイのかよ」
「違うわ!私はあなたみたいな最低の男にこんな事されても感じたりなんか…」
「素直になれよ、本当は嬉しいんだろ?」
「はぁはぁ、嬉しくない、全然気持ちよくなんか、んはぁっ、な、ないわ」
ふーっ
はっ♡
あっあっ♡
っ♡

強情な態度を見せる高城に男はニヤリと笑うとピストン運動をさらに速める。
「んあぁっ!?だめぇ!速くしたらだめぇぇ!!」
「おらおら!さっさと認めちまえよ!先生はちんぽが好きってよ!」
「あぁぁっ、ち、違う、私は……あんっ!くふぅ……動かないでぇ!」
必死に耐えようとするが男の激しい突き上げに腰が浮き上がりそうになる。
「あぁぁ!だめぇ!そこは弱いの!そこばっかり責めないでぇぇぇ!!」

ある一点を突かれると今まで以上に快感を感じる場所があり
高城はその度に喘ぎ声をあげてしまう。
「ここか?、ここがイイんだな!?」
「んくぅぅぅ、そこはぁ……はぁん、んあぁっ、あぁあふぅ」
男が腰を打ち付けるたびに豊満な胸が激しく上下に揺れ動き男の目を楽しませる。

揺れ動く胸を掴んで乳首を吸い
片方の手で揉み始めると高城の
口から甘い声が上がる。
「ああっ！胸まで、だめ！胸を触られたらっ、
んはぁっあぁ！」
「へへ、やっぱり先生は淫乱だな、
生徒に犯されて感じるなんてよ！」
パンパンパンパンッ！
「んあぅ、やめなさい、ひゃうん！」
「へへ、こんなに乳首硬く勃起させやがって、
感じてる証拠じゃないか」
「いやぁ、言わないで…、はあぁん」
コリッコリッと指先で転がされ
舐められ吸われる度にビクンビクンと感じてしまう。
「んひぃぃ！乳首だめぇぇ！！」
乳首を弄ばれながら激しく突き上げられる
「んっふあぁぁ、だめ、ちくび、ちくびあああぁぁ」


「ハァハァ。先生キスだ。舌出せ、舌」
言われるままに舌を差し出すと男の舌が絡み付いてきた。
「んむぅ、ちゅぷ、れろぉ、んはぁ、んぅぅ」
口内を蹂躙する舌の感覚にゾクッとする。
「んっ、んふぅ、んんん～っ」
「んあ、ちゅぷ、れろ、んむぅ」
ディープキスをしながら激しく腰を動かす男。
「ちゅぷ、れる、じゅるる」
ぎゅう♡
ちゅぱ
ちゅぱ♡
ちゅう♡
（嫌なのに……どうして）
嫌悪感しか無かったはずの行為が
今は快感として受け入れている事に戸惑いながら
男を抱き寄せ自らも積極的に舌を動かしてしまう
「んむぅ、ちゅぷ……んふぅ、じゅる、ちゅぷちゅぱ」
お互いの口内を犯し合い唾液を交換し合う二人。
結合部からは大量の愛液が流れ出しておりシーツに
大きな染みを作っている。

れろっ♡
れろっ♡
れろっ♡
にゅぷっ♡
はぁ♡
くちゅくちゅ
ちゅぽ♡
トロォッ〜〜♡

「へへっ、いい顔するようになって来たじゃないか先生。」
「はぁはぁ、だ、黙りなさい……」
汗だくで顔を真っ赤にし、だらしなく口を開け、目を潤ませるその表情で
凄まれても迫力など全く無い。
「素直になれって先生、ほら」
「きゃあ、ちょっとぉ！！」
ハァ
ハァ♥
ドキ…
ドキ…

男は高城を抱え上げ後ろを向くようにすると
尻を突き出すような体勢を取らせ背後から再び挿入した。
「あぁぁ！！そんなっ、だめぇ、お、奥に届くうっ！！」
バックからの突き上げで子宮口に亀頭が当たるたびに高城は悶える。
「どうだい先生、この体位からの俺のチンポの味はよぉ」
「だめぇっ！んあぁぁ、い、いや、当たってる、当たってるのっ！あぁぁん」
パチュン、パチュンと肉同士がぶつかりあう音が響く。
（ダメっ、こんなの気持ち良すぎるぅ！）
高城の顔は完全に蕩けており、もはや抵抗の意志すら残っていないようだ。
「言えよ先生、気持ち良いんだろ！」
「あぁぁ、言えない、だめぇ、そんな事の言えないわぁ」
しかし、身体は正直に反応してしまい膣内はキュウウっと締まり
子宮口は亀頭に吸い付いてくいる。
「強情だねぇ、ならもっと激しくしてやるぜ」

男は高城の両腕を掴むと
そのまま引っ張りながらの
激しいピストンを開始する。
「あぁぁっ!やっ、だめぇっ!
激しいのダメなのぉ!
んはあぁぁ!!!」
あまりの気持ちよさに髪を振り乱し
ながら絶叫する高城。
その表情からは普段の清楚さは
完全に消え去っており
ただひたすらに与えられる快楽を
受け入れていた。
「こうか、こうかぁ!?」
パンパンパンパンッ!
グッチュッグチャッヌチュッズブッ!
「あぁぁぁ!イ、イイ!すごイイ、
んぁあぁん!!」
とうとう高城の口から
快楽を認める言葉が出てきた。
「やっと認めたか、スケベ教師め」
「ち、違うのぉ、私は、私はぁぁ!」
「何が違うんだよ、こんなに
締め付けといてよぉ!」
「んはぁっ!だめ、だめぇ!
もう許してぇ!」

グチュグチュと結合部から愛液を撒き散らしながら男はラストスパートをかける。
「先生、中に出してやるぞ！」
「んあぁいやぁっ、な、中は駄目ぇ、危険日なの！赤ちゃん出来ちゃうぅ！！」
「嫌だね、絶対中に出して、孕ませて俺の女にしてやるよ！」
「やめて！そ、外に、外に出してぇ！！」
「イクぜ、中出しでイケよ、全部受け止めてイケッ、おおおおおおおっ！！！」
どぴゅっ！どぴゅるるるるるるるっ！！

「んあああああっ！熱いいいいいいいっ！！！」
ドクンドクンと脈打ちながら精液が流し込まれる感覚に高城は絶頂を迎える。
「いやぁぁあぁっ、出てる！中にいっぱい！！熱いいっ！、イク、イッちゃうぅぅっ！！！！」
膣内に射精されると同時に絶頂を迎える高城。
全身が痙攣を起こしアソコからは大量の潮を吹き出している。

「はぁ、はあ、はあ……んあぁ……」
男根をズルリと引き抜くとごぽりとマンコから入り切らなかった精子が溢れ出てくる。
「ふぅ、最高だったぜ先生」
満足げな笑みを浮かべると男は高城をマットの上に寝かせる。
「ん……はぁ……んぅ」
高城は虚ろな目をしながら呼吸を整えていた。

「これであんたは俺の女だな」
「ハァハァ、だ、誰があなたなんかのものになるもんですか……！」
息を整えながら高城は強気な態度を取り、睨みつけてくる。
「へえ、まだそんな態度取るのかよ」
「体を汚されたくらいで私が屈するとでも思ったら大間違いだわ……」
「ふぅん、なら試してみるか？」

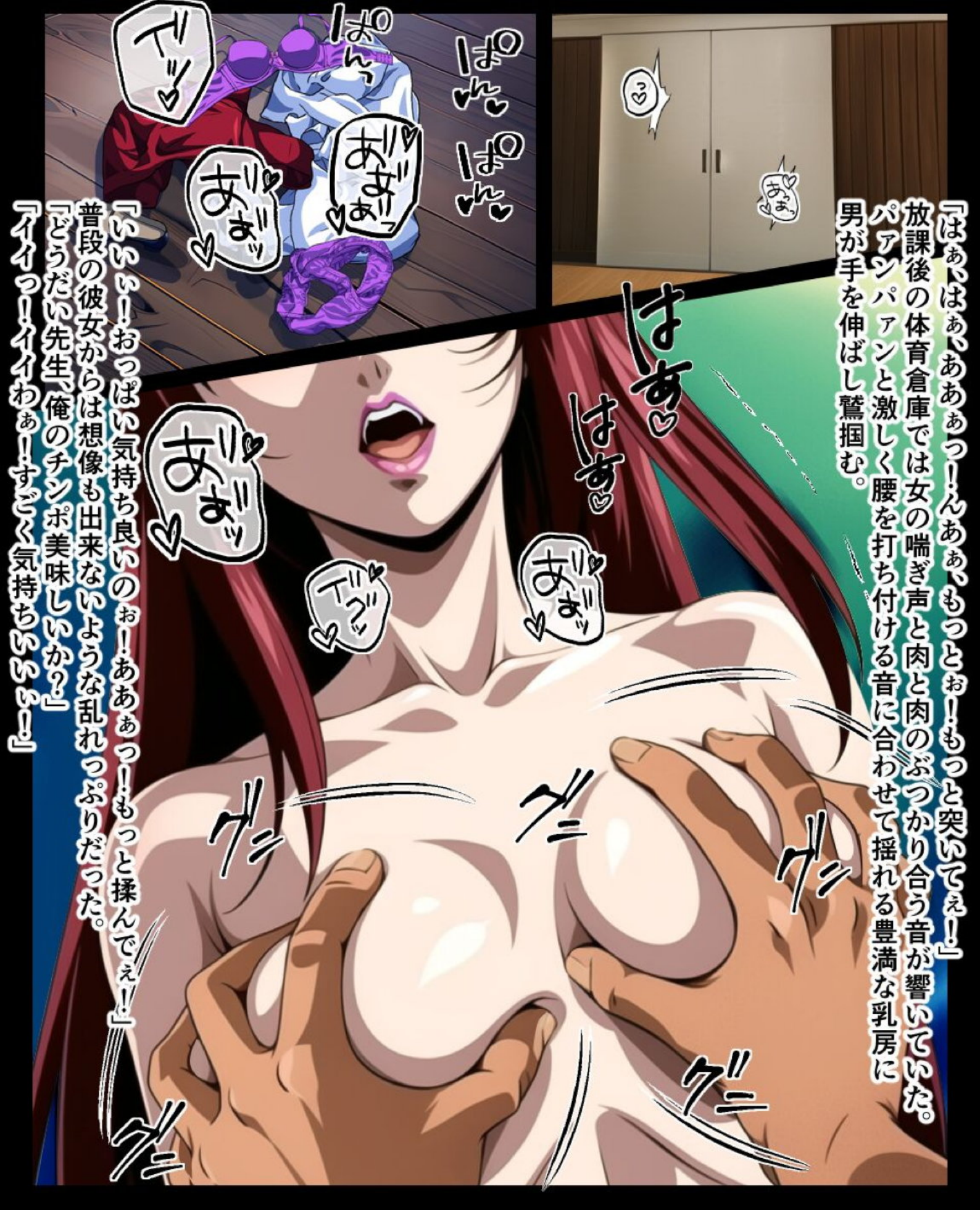
出した直後だというのに男は勃起したままの肉棒を見せつけてくる。
「なっ⁉」
「俺はまだまだ満足しちゃいないんだぜ？もっと付き合ってもらうからな」
「ま、待ちなさい……やっ、これ以上はだめぇ……んあぁ、やあぁぁっ…」
静止の声を無視して再び肉棒が挿入され身悶えする高城であった…

「ふう、出した出した、さすがにもう打ち止めだぜ」
あれから何時間たったのだろうか、すっかり日が暮れてしまっている。
男は満足げな様子でマットの上に寝転んでいる高城を見る。
「あひぃ、んあぁぁ……あぁぁ……んはぁ……はぁ……はぁ……んくぅ」
高城の目は虚ろで口の端から唾液を垂らし、全身精液まみれで足を広げたまま
ビクビクと痙攣して膣内からは入りきらなかった大量の精液が流れ出ている。

「先生マジエロかったぜ。またヤらせてくれよ」
男は身支度を整えながら高城に語りかけるが返事は無い。
「んじゃ、俺は帰るけどしっかり片付けしといてね」

アノ日を境に、男子生徒は頻繁に高城を呼び出し犯すようになった。

その度に高城は嫌々ながらも受け入れ、度重なる行為によって完全に堕ちてしまい次第に自から求めてくるようになっていった。


「はぁ、はぁ、あぁぁっ！んあぁ、もっとぉ！もっと突いてぇ！」
放課後の体育倉庫では女の喘ぎ声と肉と肉のぶつかり合う音が響いていた。
パァンパァンと激しく腰を打ち付ける音に合わせて揺れる豊満な乳房に
男が手を伸ばし鷲掴む。
ぱぁん
ぱぁん
ぱぁん
あぁぁっ
あぁッ
イッ
はぁ
はぁ
あぁッ
あぁッ
イグッ
グニ
グニ
グニ
グニ
「いいぃ！おっぱい気持ち良いのぉ！あぁぁっ！もっと揉んでぇ！」
普段の彼女からは想像も出来ないような乱れっぷりだった。
「どうだい先生、俺のチンポ美味しいか？」
「イイっ！イイわぁ！すごく気持ちいいぃ！」

男に跨り胸を揉まれながら下から突き上げられる快感に夢中になっている。
「そんなに腰振ってよほど俺の子種が欲しいみたいだな、この淫乱教師が！」
「違うのぉ、あなたのおちん◎んが凄すぎるからいけないのよぉ！」
そう言いながら自ら尻を振り男を求める姿は完全に快楽に溺れた雌の姿だった。
男は突きながら胸を揉み乳首を摘む。
「あぁぁん！！おっぱいダメぇ！感じすぎておかしくなるうぅ！！」
さらに激しくなるピストン運動に高城は絶頂を迎えようとしていた。
「イク、イッちゃう！私もう限界なのぉ！お願い一緒に！中に出してぇ！」
「いいぜ先生、全部受け止めろよ！」
「出してぇ！中に出してぇ！んあぁイクッ！イッちゃうぅぅんあぁぁぁぁっ！！」
ドビュッドビュルルルーーーーーーーーーーーーーーー！！！！
子宮口をこじ開けるようにして流し込まれる大量の精液。
「あぁぁぁっ！出てるうぅぅ！熱いのいっぱい出てるうぅぅ！！」
男が射精したと同時に高城も大きく仰け反って絶頂を迎える。
「はあぁ、あぁぁ……すごいぃ……いっぱい出てるぅ」
絶頂の余韻に浸りながら高城はうっとりとした表情を浮かべ満足げに微笑んでいた…
グニッ
グニッ
グニッ
ズチュ
ズチュ

数ヶ月後、男子生徒との快楽に身を任せたままの生中出しセックスを続けた結果高城の妊娠が発覚した。

教師が未婚での妊娠発覚当然学校は騒ぎになったが彼女は冷静に対処し学校側もそれを了承。

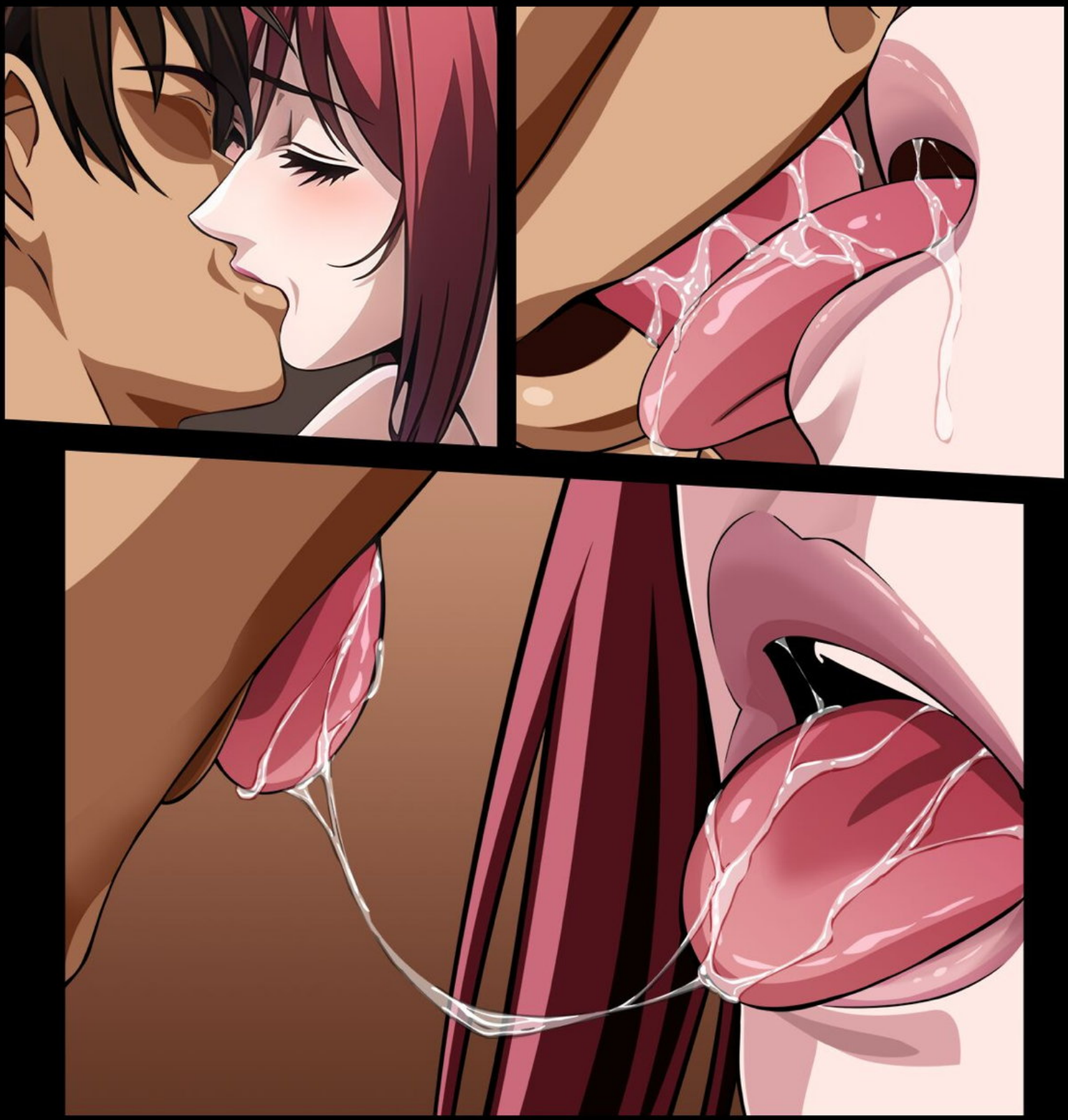
お腹の膨らみも目立つようになってきたが授業も普段通り続ける高城の今日は特別授業だ。

カツカツ

男子生徒は高城を自分の女だと言わんばかりに妊娠についての特別授業を行うように指示を出していた。

ガラッ

「そ、それでは皆さん、本日は保健の授業を行います」
教壇に立つ高城の姿はお腹は大きいが妊婦とは思えない程にスタイルが良く
その美貌も相まって非常に魅力ある姿だった。
「先生、質問良いですか？」
一人の生徒が手を上げる。
「はい、どうぞ」
「先生がどうやって赤ちゃん出来たのか教えてください」
ニヤ付きながらわざとイヤらしい質問をする生徒に対して高城は頬を赤らめながら
恥ずかし気に答える
「そ、それはですね……男性の性器には精子というものが存在して、女性の体内に入ると
卵子と結合して子供が出来るのです」

「へー、じゃあ先生はその男とエッチして妊娠したんだね」
「え、ええ、彼とは数え切れないほどに交わり合いました。もちろん避妊なんて一切せずに…」
その行為を思い出したのか顔を真っ赤にしてモジモジとしていた。
その様子を高城を妊娠させた男は満足げにニヤ付きながら眺めているのであった。

完